お知らせ

平成21年度薩摩川内市男女共同参画フォーラムは、
12月5日(土) 12:50～国際交流センターで開催されます！

【大会テーマ】
次世代につないでいきたい男女共同参画社会とは
～ 仕事と生活のハーモニー（調和）～

【基調講演】
［講師］ 佐々木 常夫 氏（㈱東レ経営研究所代表取締役社長）
［演題］「私は仕事も家族も決してあきらめない」

鹿児島県内で実際に育休をとった、家庭で存在感のある素敵な 育men（イクメン）

もうすぐ父親になるプレパパ、田中さん。

一ヶ月育休をとって、他の人にもすすめたいという二児の父、吉冨さん。

八ヶ月育休をとって、家族の絆を再発見した三児の父、Kさん。

一年間の育休をとって、「専業主夫」にはまりそうになった二児の父、鈴木さん。

これは実際に当県で過去四年間に育休をとられた次の方々へのインタビューを元にしたものです。吉冨 誠さん、Kさん、鈴木博信さん、ご協力ありがとうございました。

もうすぐパパになるんです！楽しみ！

へーっ。それはおめでとう。で、育休をとるの？

育休って、女がとるものでしょ。男でもとれるのかな？

えーっ。時代遅れだなあ。育休をとる男性って増えてきてるんだよ。ぼくは、育休と有給をあわせて一ヶ月。両親に頼れない状況だったからねえ。

妻を助けたかったから、約八ヶ月とったよ。

僕は育休をとってみたかったんだよねえ。一年とったけど、本当はもっととりたかったなあ。

でもさぁ。職場はすぐOKくれるの？

うん。快く「いいよー！」っていってくれたよ。

僕も。上司に理解があって、「子育てしておいで」って、背中を押してくれた。

へえ。僕は、始めは上司が「えー!?」っていった……。でも、転勤の時期と重なったのもあって、同僚は応援してくれたよ。

ふーん。育休って、三食昼寝付きで楽できそうだよね。

そう思うでしょ。甘い！　何が大変って、家事！　仕事よりも大変だって思ったよ。

そうそう。子どもが起きている時は、相手をして、昼寝をしている間に片づけしたり…。ゆっくりする間はなかったなあ。でも妻が届かないようなところを見つけて、掃除したりして、結構楽しかったよ。

いろんなことが経験できたし、家族の大切さがしみじみわかったなあ。

僕は、子どもが『ママー！』って泣き始めた時が一番大変だった。ママじゃなきゃだめなの？って泣きたくなった。僕なりにがんばったんだけどね。

でも毎日が楽し過ぎて、もう少し休みをとっちゃったら、そのまま『専業主夫』になっちゃいそうだったよ。

子どものお迎えのとき、他のお母さんたちに、「育休」をうらやましがられてねえ。自分の旦那からは、「よそはよそ。うちはうち。」って言われたって。試す価値があるのに。毎日が子どもとのかかわりだし、男親だからできることもたくさんあるよ。

へーっ。ところで次の子どもさんが生まれるときは、また育休をとりたいですか？

ぜひ、とりたいなあ。他の人にも勧めるよ。

僕もとりたい。けど、うちは妻が「次はとらなくていいよ」って。

ところで、育休中、給料はもらえるの？

各会社の規定にもよるんだけど、男女に関わらず、雇用保険の方から休業手当が三割くらいは出るよ。

えーっ。そうなんですかあ。職場を決めるときは、そこもチェックが必要だなあ。

以前は、手当ても無かったから、社会の状況も段々と良くなってきているよね。

そうかあ。上司に相談してみよう！

育休を後押しする周囲の理解と環境も必要だけど、やっぱり最終的に決めるのは自分達。子どもの成長はあっという間。子どもと触れ合う期間は短いから、何を大切に生きていきたいのか、『生き方』も考えなくちゃ、決められないかもね。

当市であった実話を元にした短編小説

咲子と隆志の場合……

妻咲子はもう限界だった。「もう、辞める。絶対辞める。」そう、心では決めていた。

転勤で夫婦別々の生活。二人の子どもと、新しい土地。慣れない仕事場。小学校低学年の息子を送り出し「ママ～。」と泣き叫ぶ一歳半の息子を保育園において、仕事場に向かう。その声が耳から離れず、胸と胃がきゅっと縮む。

笑顔で夕方迎えに行けたら、と思っても、できない。一緒に遊んでやりたい、と思っても、家事をしないわけにはいかない。

離れて暮らす夫に話したくても、電話するエネルギーもない。話してどうなるわけでもない。

「私は辞める。子どもたちの面倒をきちんと見る。仕事も育児も家事もすべてをやりこなすなんて、無理。辞めたら、この泥沼から出て、普通のちゃんとした家庭を築けて、私も楽になる。」

咲子は、その決心を、職場の人たちにそっと打ち明けてみた。

回りの人たちは、困り果てた。

「専門職の人不足で、辞められたら困る。今の職場には、一番貴女が必要。」

「せっかくここまで続けてきたのに。辞める以外に、方法はないの？頑張れないの？」

あれほど堅く「辞める」と決めたはずだったのに、「咲子は今辞められない」状況にあることがはっきりした。

「辞められない。」「この生活を続ける。」……頭の中で、こだました。

ついに、夫に電話して、話した。

「もう、本当に限界。このままでは崩壊してしまう。貴方も本気になって私と家族のことを考えて……。」

夫隆志は、自分の上司に思い切って相談してみた。上司は、状況を理解し、育児休業をとることに賛同してくれた。上司は言った。

「家族を守るのはお前の役目だ。仕事は代わりがいるが、家族には代わりはいないんだから。」

そして、咲子が転勤になってから六ヶ月後の夏休みから、隆志は「育休」に入った。

出勤しないで、子どもの面倒と家事の毎日。結構楽な生活かなあとぼんやりとイメージしていた。「三食昼寝付き」って言うし。

もともと料理は嫌いではなかった。隆志は、かわいい盛りの片言を話す息子や、六歳の元気な息子と過ごす日々を楽しむつもりでいた。

いざ、育休が始まると――――。

悲しくなると、すぐ「ママ～。」と言い出す子ども。

今度のご飯は何を作ろうか……。アイディアが欲しい。

昼間、子どもの面倒をみている隆志に、「はんな、どげな仕事をしちょっとな？」等々、周りの人たちの好奇に満ちたことば……。

仕事に復帰して四年経った隆志の胸には、ときどき、いろいろな場面や多くの人の声が甦る。

この「育休」のおかげで、咲子は仕事を続けることができ、家族は危機を脱出できた。

そして、隆志は、大きな宝物を発見した。

子どもたちとの絆。母として、妻としての咲子への尊敬の念。そして、実母への感謝。

家庭生活での自分の居場所がどんなに大切か。愛おしい、今、このときしかない、期間限定の子どもとの時間と空間。

今では日常生活上のほぼすべてを咲子と隆志は分担・協力している。それを楽しんでいる隆志。楽しめるようになった、かけがえのない体験だった、と今思う。

三番目の子どもにも恵まれた。咲子は、現在「育休」中。

「〝辞める〟と言っていたころとは全然違う、明るい表情が戻ってきたな、咲子。俺も……。」

（※登場人物は仮名です。編集部）